

宮に初めて参りたるころ

宮に初めて参りたるころ、もののはづかしきことの数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々参りて、三尺の御几帳の後ろに候ふに、絵など取り出でて見せさせ給ふを、手にてもえさし出づまじう、わりなし。「これは、とあり、かかり。それが、かれが。」などのたまはす。高坏に参らせたる大殿油なれば、髪の筋なども、なかなか昼よりも顕証に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出でさせ給へる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、かかる人こそは世におはしましけれど、おどろかるるまでぞ、まもり参らする。

曉にはとく下りなむといそがる。「葛城の神もしばし。」など仰せらるるを、いかでかは筋かひ御覧せられむとて、なほ伏したれば、御格子も参らず。女官ども参りて、「これ、放たせ給へ。」など言ふを聞きて、女房の放つを、「まな。」と仰せらるれば、笑ひて帰りぬ。ものなど問はせ給ひ、のたまはするに、久しうなりぬれば、「下りまほしうなりにたらむ。さらば、はや。夜さりは、とく。」と仰せらる。ゐざり隠るるや遲きと、上げちらしたるに、雪降りにけり。登花殿の御前は、立蔀近くてせばし。雪いとをかし。

昼つ方、「今日は、なほ参れ。雪に曇りてあらはにもあるまじ。」など、たびたび召せば、この局のあるじも、「見苦し。さのみやは籠りたらむ」とする。あへなきまで御前許されたるは、さおぼしめすやうこそあらめ。思ふにたがふはくきものぞ。」と、ただいそがしに出だし立つれば、あれにもあらぬ心地すれど参るぞ、いと苦しき。火焼屋の上に降り積みたるも、めづらしう、をかし。